

■プロフィール

西田 徹 (にしだ・とおる)

1973年福岡県生まれ。

大学卒業後、教育系出版社、メーカー勤務を経て、創成社に入社。現在では、編集部リーダーとして、多くの新刊を担当している。



——仕事柄、1週間にたくさんの活字を読んでいると思いますが、字を見るのが、嫌になることはないですか？

校正する原稿とプライベートで読む本では、全く異なるので、嫌になることはありません。

とは言うものの、新刊がかさなる4月は1日中校正をしなければいけないので、さすがに帰りの電車で本を読む気にはなれず、じっと目を閉じて目を休めることもあります。

——目を酷使する仕事ですが、目のケアは何かされていますか？

特にケアをしているわけではないのですが、私はパソコンの光が苦手なので、できるだけ画面の明るさを抑え、疲れてきたらパソコンを閉じインターバルを開けながら、作業を進めています。

——休日はどうのように過ごしてリフレッシュしていますか？

休みの日には、娘と一緒にご飯を食べに行ったり、一緒に思いっきり遊ぶことでリフレッシュしています。

——最近、気になっていることなどあれば、教えてください。

一昨年に亡くなった、歌人の河野裕子さんです。それまで短歌にはまったく関心がなかったのですが、言葉遣いが斬新で、「古い」「難解」という私のなかのイメージが180度変わりました。

もちろん、1つひとつの歌を深く理解し、味わうことができるわけではないので、よくわからないまま読みとばしてしまふものも多いのですが、ドキッとしたり、キラッと輝く歌の魅力は他には代えられません。

——面白い原稿とそうでない原稿を、見分けることができますか？

入社したての頃は、ある程度目を通さなければ面白い原稿であるのかどうかわからなかったのですが、最近は最初の1章で、だいたいわかるようになってきました。

——明らかに手直しを加えた方が良い原稿も入ってくると思いますが、その場合、どのようなことに気を遣っていますか？

いきなり最初から赤字を入れるのではなく、執筆者の先生に確認を取りながら修正を進めていきます。しかし、執筆者の先生が強いこだわりを持っている場合は、先生の意向を優先し必要最低限の修正にとどめています。

——編集として入社して約10年になりますが、特に印象に残っているエピソードを教えてください。

『大学生が出会う経済・経営問題』という本の編集作業です。この本は、執筆者の数が24名と大人数で、それぞれ執筆者の原稿を一つの方向にまとめる作業にかなり骨を折りました。後からああすればよかった、こうすればよかったと反省させられる点も多く、非常に勉強になった仕事でした。

——編集者を志している方へアドバイス、またはメッセージを願っています。

編集者といっても、書籍なのか雑誌なのか、または、どのような分野の本を作りたいのかということでも、編集者のタイプは大きく変わってきます。まずは自分がどんな本を作りたいのか、どんな編集者になりたいのか、明確な編集者像を描くことだと思います。明確な編集者像を描くことによって、それに向けてこれから自分が何をすれば良いのかがみえてくるはずです。

——こだわりの強い執筆者に対して、どのように意見を伝え編集作業を進めていますか？

基本的には先生の意向に従いますが、明らかになまちがいや会社の意向がはっきりしている場合は、「社内でのような意見が出ている」というように、私1人の意見ではなく「一般的にはこのようにみられています」と伝えると、こだわりの強い先生にもご理解をいただける場合が多くなります。

——読みやすい文章とは、どのような文章ですか？

1つひとつの文章が簡潔なものが一番わかりやすいと思います。1つの主語にたくさんの形容詞がついている、1つの動詞にたくさんの副詞がついている文章は、何度も読み返さなければ理解することが難しく、読みにくいと感じます。また、何度も何度も同じ言葉が出てくる文章も読みにくいです。



——最後に、おすすめの本を1冊、読者の方へ紹介してください。

私がおすすする1冊は、『大学生が出会う経済・経営問題』です。身近な事例から、経済学・経営学の基礎をかなり幅広く紹介しています。大学生向けに書かれた本ですが、実際に自分が体験していることから経済学や経営学を学ぶことができるので、会社員の方や一般の方にも楽しく読んでいただける1冊です。